

# 「則天」を忘れまい

経済協力開発機構（OECD）という国際機関があつて、これに加盟している三五カ国が先進国とされる。この機関が実にさまざまな国際比較統計を公表している。日本の国民一人当たりの医療機関受診回数は年間一二・九回だという。先進国平均は六・

六回である。対照的に、一人の医師が診察する年間の患者数は、日本では五六三三人であるが、先進国平均では二二七七人である。日本人は先進国の平均の二倍ほどの頻度で病院に通う一方、医師とのコミュニケーションの密度は随分と薄いということなのであろう。

病院に行つても、問診、視診、触診といった面倒な手続きは省かれ、CT（コンピュータ断層撮影法）だのMRI（磁気共鳴画像法）にまわされ、それによつて得られた身体内部の画像を眺めながら病変部についての説明を受け、治療方法などを告げられる、といった診断の様子が目に浮かんでくる。

CTというのは、身体に放射線ビームを照射して通過する線量の差をコンピュータ処理して得られる

渡辺利夫（たなべ ちお） 拓殖大学学事顧問

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

画像のことだが、その技術進歩は著しい。何しろ治療の不要な、というより不可能な微細な異変部までを発見してしまうのである。それにCTによる被曝量は、レントゲンとしてお馴染みの技法に比べて格段に高いといわれる。

CTスキャナーというのは、CTの撮影装置のことである。日本の人口一〇〇万人当たり設置台数は世界で第一位の一〇七台、第二位のオーストラリア五六台、第三位のアメリカ四一台をはるかに凌いでいる。日本の病める医療のありようがこれらの数値の中に反映されているのであろう。

平成二十八年の日本人の平均寿命は、男性八〇・九八歳、女性は八七・一四歳で、男女共に世界第二位である。さらに伸びていつて男性八五歳、女性九〇歳くらいにまで伸びるといふ推定もあるが、人間が自然生命体である以上、ここいらが限界であろう。「則天」とは天地自然の法則のことだが、現在の日本人はこの観念を没却してはや省みることがないのであろうか。